

分析美学の諸問題

Problems of Analytic Aesthetics

- ① 美学(芸術学)の目的
- ② 芸術の定義
- ③ 作品と解釈
- ④ 美の定義
- ⑤ 美の論理学?
- ⑥ 美と意識
- ⑦ 美的と倫理的
- ⑧ 対象化
- ⑨ 情報美学
- ⑩ ジャンル
- ⑪ 進化美学
- ⑫ メタ芸術
- ⑬ 虚構
- ⑭ 観測選択効果(1)
- ⑮ 観測選択効果(2)

第8章 対象化

対象化objectificationの諸相

〈記号－指示対象〉関係の三様態 (C. S. パース)

- ★ アイコン……類似性(明証的、形象的、直観的) 星印 絵文字 onomatopoeia(擬声語)
- ★ インデックス……因果関係(経験的、歴史的) 指示代名詞 叫び 訛り 合言葉
- ★ シンボル……規約(制度的、理論的) (星印)

- ◆ アイコンのシンボル metaphor(隠喩) 文字による擬声語
- ◆ インデックスのシンボル metonymy(換喩) 文字による指示代名詞
- ◆ インデックスのアイコン 矢印 指差し図形
- ◆ シンボルのアイコン 人文字 カリグラフィ 書

芸術と対象との垂直的・メタ的關係 ……再現represent 叙述predicate

芸術と対象との平行的・隣接的關係 ……表出express 暗示allude

芸術が(複合的)性質を ……記述describe 選択select 創造create

芸術が命題を ……提示present 主張assert 説明explain

広告が芸術を ……例示exemplify 使用use 借用borrow 包含include

芸術が広告を ……指示denote 言及refer 引用quote

芸術が芸術(同ジャンル)を ……模倣imitate(平行的・対象レベル)

芸術が芸術(他ジャンル)を ……主題化thematize(垂直的・メタレベル)素材化

パロディ、パスティーシュ、オマージュ、二次創作、キツチュ……………

コンセプチュアルアートの四つの形態

(トニー・ゴドフリー『コンセプチュアル・アート』 p.7)

- ・レディメイド
(デザインの排除) 芸術作品の固有性・テクニクによる特権性の拒否
- ・介入(インターベンション)
(スタイルの排除) ハプニング、路上美術館など
脈絡、環境から分離された純粹主義の拒否、予定調和的脈絡の拒否
- ・記録(ドキュメンテーション)
(パフォーマンスの排除) 本体と代理、証拠品との格差の拒否
- ・言葉
(スタイルの攪乱・メッセージの誇張) 知覚的性質の拒否

五番目の要素を付け加えるなら、

- ・越境(ジャンル誤認の誘発) (「介入」の変種か:スタイルの攪乱)
(フェイクドキュメンタリー(POV) 芸術の現実化の一例 虚構論を誘発)
現実化と批評化(両極化) 芸術と哲学の境界の曖昧化(cf. 第1章)
芸術外からの／への陰伏的越境 ex. プロレス ショーが「真剣勝負」へ
コンセプチュアルアート イタズラが芸術に(芸術論が芸術に)越境した例か
哲学はいつ芸術になるのか 芸術と他の文化との関係は常に非対称的か
(ex. 科学は芸術になりうるが芸術は科学になりうるとは限らない)
芸術よりも包括的な文化は何か ……遊戯?

コンセプチュアルアートの芸術性

論証A

- ① 芸術作品は、何かを主題化(対象化)する
- ② オブジェは、主題(対象)を持たない
- ③ オブジェは、芸術作品である
- ∴ ④ 主題のない主題化作用がある(対象のない対象化作用がある)

- ①→ 非再現的芸術・抽象芸術の例 再現と表出
- ②→ 自分自身が主題ではないか ← 芸術とは何か、が主題である
- ③→ オブジェは芸術ではない オブジェは哲学である 伝統的芸術と前衛芸術の区別
- ④→ 空なる主題化作用 無という主題 芸術を経由した非芸術は芸術以前の非芸術とは異なる.....

論証B(その1)

- ① 芸術作品は、不可欠な知覚的特徴によって美的経験をもたらすことを意図されている
- ② コンセプチュアルアートにとって、知覚的特徴は不必要である(現物を見る必要はない)
- ∴ ③ コンセプチュアルアートは芸術ではない

- ①→ 文学作品はどうか。概念的特徴だけではないのか(ジャンル変換) 知覚的性質と概念的性質の区別は曖昧 自然と慣習 意識に与えられる特徴によってであれば十分ではないか(サブリミナル作品.....無色無臭の興奮剤が散布され、観客の心をコントロールする作品.....と比較せよ)
- ②→ 「不要に思える知覚経験」を必要とするから「芸術」なのではないか あるいは少なくとも、知覚的特徴の説明(伝達)は必要ではないか(間接的知覚的特徴が必要とされる) 概念作用が知覚的性質となりうるのではないか(cf. 第1章 ロジカル・ハイ)
- ③→ コンセプチュアルアートというジャンルが立てられればよいだけではないか(美術としてはフェイク、文学・哲学としては真正というハイブリッドなジャンル?)

演劇、ハプニングとして読み替えれば大半のコンセプチュアルアートは知覚的芸術である

コンセプチュアルアートの芸術性

論証B(その2)

- ① 芸術作品は、不可欠な知覚的特徴によって美的経験をもたらすことを意図されている
- ② コンセプチュアルアートにとって、知覚的特徴は不必要である(現物を見る必要はない)
- ∴③ コンセプチュアルアートは芸術ではない

- ①→ 美術作品に限定して、現実世界ではその通りであると認めるとしよう
- ②→ 虚構世界で不必要ということではないか or 概念的特徴は虚構的な知覚的特徴ではないか
- ③→ コンセプチュアルアートは虚構の芸術ではないか or 虚構において芸術なのではなかろうか

◇……虚構の中で G……芸術である C……知覚的性質による観賞を意図されていない

A. 虚構にあるコンセプチュアルアート

◇ $\exists x(Gx \wedge Cx)$ ある非知覚的なものが芸術である、というmake-believeが公認されている
非知覚的芸術がある、というmake-believeが公認されている

B. 虚構の中では芸術である現実のコンセプチュアルアート

$\exists x \diamond(Gx \wedge Cx)$ あるものが、公認されたmake-believeの中で、非知覚的芸術である

C. 現実に虚構的コンセプチュアルであるコンセプチュアルアート

$\exists x(Gx \wedge \diamond Cx)$ ある芸術が、公認されたmake-believeの中で非知覚的である

D. 現実に虚構的芸術であるコンセプチュアルアート

$\exists x(\diamond Gx \wedge Cx)$ ある非知覚的なものが、公認されたmake-believeの中で芸術である

※ B、C、Dのmake-believeでは、贋作はオリジナルと同じ価値を持つとは限らない

非描写的でありながら、芸術特有の「虚構性」が深化 コンセプチュアルアートは芸術の中の芸術？

究極の文脈主義？ 不可識別対象を識別せよ？

不可識別対象への異なる解釈が正当化されると・・・第3章で見たピエール・メナールの例再考
(不可識別対象の異なる指示・対象化作用が正当化されると…………)

デュシャン、ウォーホル(非芸術をまねたor記した芸術)

“Sherrie Levine after Walker Evans” 1980、メナール(芸術をまねたor記した芸術)

- ① 作品Aは、物体Aに具体化され、作品Bは、物体Bに具体化された
- ② 物体Aと物体Bは見分けがつかない(互いに不可識別対応物である)
- ③ 作品Aについては解釈 α が正しく、作品Bについては解釈 β が正しい $\alpha \neq \beta$
- ④ 物体Aと物体Bの位置が何度か入れ替わり、同定できなくなってしまった
- ⑤ 物体AかBの一方を選び出して展示し、仮に作品Cと名付けて解釈を試みた
- ⑥ 作品Cの正しい解釈を α か β のいずれかに決めることはできない
- ∴ ⑦ 作品Cについて解釈はできない

- ⑧ 作品Xは、物体Xに具体化された
- ⑨ 物体Xの不可識別対応物Yが存在することは可能である(②の可能性は否定できない)
- ⑩ 物体Xが物体Yと入れ替わっていることは可能である(④の可能性は否定できない)
- ⑪ 作品Xの正しい解釈を**必然的に決める**ことはできない(⑥の可能性は否定できない)
- ∴ ⑫ 芸術作品の解釈の正しさは常に偶然的である(必然的に偶然的である)

非芸術についての同様の可能性は生ずる。(cf. ゾンビ仮説)

芸術作品にとっての「解釈」は(物体(テキスト)にとっての「作品」)は、人間にとっての「意識」に相当？ 解釈が文脈の関数である(公算が高い)ところに、芸術とクオリアの違いがある
(物理へのsupervenienceの有無)(cf. 第3章「相対主義的普遍主義の可能性」)

不可識別対象をめぐる可能的諸問題

- ◆非知覚的にのみ異なる不可識別対象 (経験的識別域とposthuman)
 - ◎微細な違い
 - ◎素材の違い
- ◆由来のみが異なる不可識別対象 (singular artwork か multiple artworkか)
 - ◎制作時期の違い
 - ◎作者の違い
 - ◎作者の有無の違い
- ◆指示対象のみが異なる不可識別対象 (モデルのみが異なる場合)
- ◆ジャンルのみが異なる不可識別対象 (ジャンル指定と知覚的特徴の独立性?)
- ◆履歴のみが異なる不可識別対象 (歴史の進展に伴う芸術的意義の変化)
- ◆数的にのみ異なる不可識別対象 (貫世界同定と世界内同定)
 - ◎因果関係の有無

人間転送機の思考実験

- ① オリジナルが完全に破壊される場合
- ② オリジナルが不完全に破壊される場合
- ③ オリジナルが完全に残る場合
- ④ オリジナルは破壊されるがタイムラグがある場合
- ⑤ オリジナルが破壊されたかどうか不明である場合
- ⑥ ソフトシミュレーションとハードシミュレーション

主観的不可識別性の思考実験

- 主観的快樂とエウダイモニア(羨ましい状態)
- アクセスできない芸術作品

文献

Jerrold Levinson *Music, Art, & Metaphysics* (Cornell U.P. 1990)

Nelson Goodman "About." *Mind*, 70 (1961)

Arthur Danto *The Transfiguration of the Commonplace* (Harvard U. P., 1981)

トニー・ゴドフリー『コンセプチュアル・アート』(1998)岩波書店

デレク・パーフィット『理由と人格——非人格性の倫理へ』(1984)勁草書房